

プロジェクト活動報告書

政策・メディア研究科 修士1年 遠藤 忍 (81124262 / enshino@sfc.keio.ac.jp)

個人の研究題目と概要

研究題目：「普遍的コミュニケーション能力育成のための学校外国語教育の事例研究」

本研究は、日本の義務教育における外国語教育のあり方を、日本語を含む様々な言語の基盤となる「普遍的コミュニケーション能力」の育成という観点から検討・提言するものである。日本の学校外国語教育に関しては、おおむねコミュニケーションを重視する傾向が強いと言える。しかしながら、「コミュニケーション能力」の定義については様々な議論がなされている。本研究では、この「コミュニケーション重視」の外国語教育について、一歩踏み込んだ検討を行う。調査に当たっては、事例として、茨城県教育委員会他が主催する「Interactive English Forum」というコンテストの中学生の部を取り上げる。コンテスト本番や本番に向けた県内各校の取り組みの調査から、「普遍的コミュニケーション能力」を育成する教育方法のあり方について検討する。

プロジェクトの活動について

言語教育デザインプロジェクトでは、学部研究会(古石篤子研究会)、およびプロジェクトミーティング(平高教授および古石教授ご担当)への出席と活動をベースに研究活動を行っている。以下、学部研究会での取り組みと、プロジェクトミーティングでの取り組みを分けて記述する。

古石篤子研究会での活動

今学期は、1) 異文化・多文化教育に関するもの、2) 多言語活動の実践に関するもの、3) 移民とバイリンガル教育に関するもの、の3つをテーマにして輪読によるインプットを行った。輪読論文については、以下参考文献にて挙げる。また、学期の中盤には、奈良教育大学・教職大学院より、吉村雅仁先生をお呼びし、小学校における多言語活動の実践に関する興味深い講話を伺った。

今学期の輪読活動のテーマは、私の研究テーマとダイレクトな関わりは薄いものであったが、どれも外国語教育に携わる者、むしろ教育に携わる者としては押さえておかなければならない内容であった。教育理論を実践に落とし込む、という点において、吉村先生の講話を中心とした輪読・議論は大きな収穫があった。また学期の最後に読み解いたジム・カミンズ氏のバイリンガル教育理論については、今後の研究の理論構築の部分で非常に役に立つものとなった。なお、古石篤子研究会では、学期末に個人研究レポートの執筆が義務であり、今学期は筆者の研究題目に関連して、Interactive English Forumの出場者の談話分析のパイロット研究を実施する。

【輪読で使用した論文・実施順に】

- ・井上輝夫「存在の危機をめぐる序章 -21世紀の知のあり方を考える-」未出版
- ・山崎あずさ(2011)「ステレオタイプと多文化教育の現状・課題について ~日本の国際理解教育とアメリカ・ドイツの多文化教育の比較を通して~」, 『2010年度秋学期古石研究会チームペーパー』, 未出版
- ・吉村雅仁(2008)「言語意識教育のためのカリキュラム開発-「見える」カリキュラムと「見えない」カリキュラム」, 古石篤子=編著『言語教育における多様性について：初等・中等教育における政策と実践(1)(2)』, 慶應義塾大学21世紀COEプログラム「総合政策学ワーキングペーパー」No.136 & 137, pp.20-28
- ・Hidalgo, N. (1993) "Multicultural teacher introspection", in Perry, T. and Fraser, J. (eds.) *Freedom's Plow: Teaching in the Multicultural Classroom*, New York: Routledge.
- ・吉村雅仁, 吉田伶子, 辻田理恵(2007)「総合的な学習の時間における言語意識教育の試み」, 『奈良教育大学紀要』, 56-1(人文・社会), pp.175-182

プロジェクトミーティングでの活動

今学期のプロジェクトミーティングでは、社会言語学の「古典」とも言うべき、1980年代に大きく活躍した社会言語学者たちの書いた論文を読み解くことを行った。具体的には、John GumperzとDell Hymesの2人である。

John Gumperzは、『相互行為の社会言語学』という本を著した人物であるが、今回輪読で使用した『Sociolinguistics - A Reader and Coursebook』では、「Communicative Competence」という章として論文が抜粋されている。また、Dell Hymesは、社会言語学の文脈において、このCommunicative Competence(コミュニケーション能力)ということ唱えた張本人である。Gumperzの論文を輪読する限りでは、1970年代までの構造主義的な言語学が研究したことに対して、社会言語学の研究者たちは、構造的な部分以外にも、文脈や発話行為など、研究すべき点があるということを主張していたことが分かった。また、Chomskyが言語能力(言語知識に近い)と言語運用とを区別したことについて、この言語能力をそのままcompetenceという単語で利用していたことへの批判からcommunicative competenceという主張が生まれてきたことも分かった。

以上の理解は、非常に浅はかなものであり、まだまだじっくりと理解するにはほど遠いと言えるほど、自身の学術英語能力が劣っていることをまじまじと痛感した学期であった。しかしながら、社会言語学の古典に原点で挑んだということと、それに触れる中で、社会言語学の主要な考え方に触れることが出来たことは大きな成果であったと言える。また、私の研究題目を追求する上ではどうしても、応用言語学における「コミュニケーション能力」の理論を把握しておく必要があったため、そのキックオフとして非常に有意義な活動となった。

【使用した文献と章】

- ・ Hymes, D “The Scope of Sociolinguistics”, in Coupland, N. and Jaworski, A eds. (1997)
Sociolinguistics - A reader and Coursebook, New York: Macmillan Press, pp.12-22
- ・ Gumperz, J. J. “Communicative Competence”, in Coupland, N. and Jaworski, A eds. (1997)
Sociolinguistics - A reader and Coursebook, New York: Macmillan Press, pp.39-48

個人の活動について

以下に、個人の研究に関わる活動について述べる。

今学期は、主だって研究活動をするというよりは、上述した2つの活動や講義等を通じてインプットを増やすべき時期と考え、主だった研究活動を控え講義への出席に注力した。大学院修士課程と並行して、英語科の教員免許取得のための科目を履修したため、主に言語学や教育学の領域では、以下のような講義を履修した。

- ・ 湘南藤沢キャンパス設置「言語教育デザイン論」(平高史也教授、古石篤子教授)
- ・ 文学部英文学専攻設置「現代英語学」(井上逸兵教授)
- ・ 文学部英文学専攻設置「英語学III」(共立女子大学・阿部圭子教授)
- ・ 教職課程センター設置「英語科教育法I」(井上逸兵教授)
- ・ 教職課程センター設置「英語化教育法特殊II」(湘南藤沢中高等部・藤田真理子教諭)

また、2011年度 森泰吉郎記念研究振興基金の修士課程研究者育成助成金に対して、本研究題目について研究計画書を執筆の上応募した。結果、本件について採択され、研究助成を受けることとなった。

以上、報告とする。

平成23年7月19日